

『極上な男のまる秘指南』

著：甲山恋子

ill：明神 翼

「まあ、固く考えないで。お遊びなんだから」

客席から昴が前に出てくると、ピアノに近づき、上に乗っているアンティークのベルを鳴らした。すると、ホストが演奏を止めて、昴の傍に立つ。

「お待たせしました。それでは、久々のイベント『奴(ど)隷(れい)市(いち)』を開(かい)催(さい)します」

奴隷市？

「まずは、素(す)敵(てき)な演奏を聞かせてくれた太(たい)陽(よう)君です。あなたのためだけに太陽君が愛のメロディーを奏(かな)でてくれます」

すぐさま女性たちから声がかかる。

「三十万」

「四十万」

どんと値段が釣(つ)り上がり、惣太は唾(あ)然(ぜん)としてしまう。

雅貴はヤクザなのか？

「あの…ここって人身売買するんですか？」

「遊(あ)びて言ったでしょう。ウチの店は、基本、最初についたホストがそのお客様専属(せんじゆく)ってことになるんだけど、気に入った子がいる場合はこのイベントでチェンジが可能なんだよ。もちろん、気になるホストを『奴隷』として競(せ)り落(お)としても、それほどでもなかったらそれまでだけ。つまり、新人ホストにとっては新たな顧(こ)客(きゃく)の開発(かいはつ)チャンスと自分の人気のバロメーターにもなるってことだ」

要するに、新人の顔見せ興業(きぎやう)ってことだ。絡(か)ら縲(く)りがわかって惣太の心は不安(ふあん)で一杯(いっぱい)だ。

「買(か)われちゃった場合、どうなるんですか？」

「一日(いちにち)、ご主人様(ごしゆじんさま)のお相手(おあひま)をする」

「……お相手？」

「お遊びなんだから、変(へ)なことはないって。ウチのお客様(おきゃくさま)は、皆さん上品(じゆんぴん)なんだから。……おっと、五十万(ごじゅうまん)で落ちたな」

太陽(たいやう)という源氏名(げんじな)のホストは五十万(ごじゅうまん)で太(たい)めの女性(にょせい)に落(お)札(さ)された。太陽(たいやう)は一礼(いちれい)するとその女性(にょせい)のもとへと歩いていく。

「今(いま)、落(お)札(さ)したマダムはジュエリーチェーン店のオーナーだ。定期的にパーティー形式(けいしき)の展示会(てんしかい)を開(ひら)いているから、その会(かい)場で太陽(たいやう)に演奏(えんそう)させたいんだろう。彼は音大(おんたい)出身(しゆしん)だから」

つまり、『健全(けんぜん)』な奴隷(ぬれい)奉公(ほうこう)ってことなのか？

「さあ、次(つぎ)はオーナーが自らスカウトしてきた超新星(ちゆうせいせい)、今夜(こんや)デビュー(でびゆ)の惣太(そうた)君(くん)です！」

俺(おれ)？

頑張(がんぢやう)って、と四谷(よつや)に背(せ)を押(お)されると、一斉(いつせい)に女性(にょせい)たちの視線(しせん)が突き刺(さ)さる。ここまで来(き)たら、おたおたするなんてみっともない。

『どんな場でも、江戸時代から続いた木村家の総領息子の矜(きょう)持(じ)を忘れるな』

父の言葉が不意に思い出された。惣太は昴の隣(となり)に立つと、深々と頭を下げた。

「初めまして。木村惣太と申します」

一瞬、ざわついていた場が静まってしまう。どうしたのかと惣太が隣の昴を見るが、彼は気を取り直したように言葉を続けた。

「ええっ…と、見てのとりのナチュラルな惣太君です。一味違う隣のお兄ちゃんに癒(いや)されたい方、ぜひお声を！」

今度はくすくすと笑い声が起こり始めた。もしかしたら馬(ば)鹿(か)にされているのではと思い始めた惣太だが、客の中の一人から声かけられた。

「一万円」

明らかにからかわれている声かけだ。くすくすと笑っている女性もいた。

さっきのホストと、あまりにも扱いが違う。

助けを求めるように隣の昴を見たが、彼はにこにここと笑っているだけだ。おまけに、「他にお声を！」などと、ますます惣太を追い込むようなことを言っている。

どう考えても苛(いじ)めだ、とキッと昴を睨むと、彼は客席の誰かを凝(ぎょう)視(し)している。

昴の笑顔が固まっているのでどうしたのかと視線の先を追うと、遠目から見てもかなりの美人が座っていた。隣にはサングラスにスーツ姿の男が座っていて、彼女が甘(あま)えるようにその男にしなだれかかっていた。

女がずっと手を上げると、中指のダイヤが人目を魅(ひ)くように煌(きら)めいた。間接照明しかない暗い店内だというのに、離れた惣太にもはっきりとわかるのだから、よほどの品質と大きさのダイヤなのだろう。

その女性が「百万」と声を上げた。

連れの男は彼女と惣太を交互に眺め、昴は黙ってしまっている。

そうなる、どう振(ふる)舞(ま)ったらいいのか惣太にはわからなくなってしまう。さっきまでは、この昴が司会進行をしていたのだから。

「さすが大物新人、惣太君です。早速、冴(さえ)子(こ)様から入札が入りました。今までの『奴隷市』最高入札価格更(こう)新(しん)です」

昴に代わって四谷が軽やかな口調で司会を買って出た。その彼に目配せされると、昴は惣太にきつい視線を投げつけると奥に引っ込んでしまった。

惣太はさっきと違って、なんだか心が浮き浮きとしているのがわかる。惣太の趣味でないが、あんな綺(き)麗(れい)な女性が自分に『最高入札価格』をつけてくれた。ということは、この店では自分にそれだけの価値があるんだ。

さっきまでの馬鹿にしたような笑いが消えたことも、惣太にとって心地よい。

思わず、高値をつけた女性に手を振ってしまった。冴子という女性は惣太に応じるように手を上げると、傍にボーイを呼んだ。すぐにボーイが「ドンペリ入りました～」と明るい声を上げる。

「すごいじゃない、惣太君。初日で、もう、入札代込みで二百万の売り上げだよ」

二百万……？

別世界の話のようだ。

ぽかんとしている惣太に構わず、四谷が他に入札者はいないかと競りを続けている。するとさっきと違って、価格を釣り上げていく女性が出てきた。

四谷は惣太の耳元で囁(ささや)く。

「オークションマジックだよ。高値がついたんで、もしかしたら掘り出し物かも、って手に入れたくなるんだ」

そんなものかと惣太が頷いていると、価格は小刻みに上がっていく。百五十万で声が止まった。

「他にはいませんか？ ……それでは惣太君は…」

「三百万！」

男の声だった。

惣太が声のほうに視線を向けると、冴子の隣に座っていた男が、すっと立ち上がりこちらに近づいてくる。

「他になければ、こちらの方に落札となります」

サングラスをしているので表情はわからないが、なんだか不機嫌そうだ。たぶん、冴子という女性の恋人か何かで、彼女が『奴隷』を落札しようとしたのが気に食わないのだろう。

それがお遊びだとしても。

男はかなりの長身で、サングラス越しにも整った顔立ちなのがわかる。もしかしたら、素(す)性(じょう)を隠さなくてはならない、芸能人かもしれない。

「四谷君。冴子と組んで俺から金を巻き上げるとは、商売上手だな」

「人聞きの悪い。代金は後払いで結構ですよ。信用しておりますから」

二人は穏やかに会話しているが、傍で聞いている惣太は、見えない槍(やり)でお互い突き刺しているような雰囲気を感じていた。

「あの…俺はどうすれば…」

「落札されたのはこちらの方です。ご主人様の言いつけ通りにご奉仕してください」

「だそうだから、惣太はもらっていくぞ」

惣太？

そりゃ、買われたんだから呼び捨てでも仕方ないが、不(ふ)愉(ゆ)快(かい)だ。

むっとした態度を出すと、男がそんな惣太の手首を掴む。

「来い。惣太」

「あの…？ 四谷さん？」

「いってらっしゃい、惣太君。ここの出勤は八時だから、それまでしっかり奴隷奉公してくださいね」

本文 p30～37 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>